

# 学びの集大成としての「保育実践演習」の授業実践

## —園舎設計の課題を通して—

下 口 美 帆  
和 田 幸 子  
山 崎 玲 奈

【キーワード】：保育園園舎建築 保育環境 授業改善

### 【要旨】

「保育実践演習」は保育士養成課程の最終期に配当され、4年間の課程全体を通じた学びの振り返り、保育に関する現代的課題についての分析・検討、自己課題の把握、が求められる。本論は2018年度実践から2022年度までの授業改善についてたどり、学生の学びについて報告する。

筆者らは、「環境による保育」の実現を、保育における現代的課題であると捉え、「理想の保育園を作る」というテーマの下、物的環境として保育園園舎設計について取りあげ、保育内容と環境の有機的關係について考察する機会とした。2018年度実践から明らかとなった授業の問題点に対して、情報の収集、授業方法の工夫、レクチャー内容の改善を行った。2022年度学生の園舎模型作品およびレポートから、保育環境への意識の高まり、保育環境と保育内容を関連付けて考える姿勢、理想とする保育者像についての考察の深まりが見られ、科目としての意義が認められたと考える。

### I. 授業実践の背景と目的

保育士養成課程の最終期に配当される科目「保育実践演習」では、保育に関する専門的知識、技術、教養、総合的な判断力の習得について自らの学びを振り返り、保育に関する現代的課題について考察し、自己課題を明確化することが求められてきた。加えて、2017年厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知による「保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について」において、本科目ではグループ討議、ロールプレイングなどの授業手法を活用することが求めら

れた（厚生労働省2018）。

本学では、短期大学部こども保育学科から四年制こども教育学部に改組し、1期生が2018年度に最終年次を迎えた。そこで我々は保育環境設定へ視点を向け、保育環境設定と保育内容との相関について学習すべく「保育実践演習」の授業構築に取り組んだ。実習園での環境構成の観察をもとに、学生が自らの課題として引き寄せ、その環境を具体的に想定するような学修の設定ができないものか、と考えた。つまり、保育環境を俯瞰すること、保育空間の中で子どもと保育者の動線を具体的に検討する学修である。そのために、「理想の保育園を作ろう」というテーマで、理想の保育園の園舎模型を作るという活動内容を含ませ、学生に園舎設計を試みる機会を設定した。乳幼児に望ましい経験を提供する保育内容を考え、それを具現化するための園環境を構想、作成、発表するプロセスで、保育を総合的に考えることができるのではないか、というのがこのテーマ設定の理由であった。これまでの学修や実習での経験の集大成として、理想と考える保育を思い描くことは、保育現場に出ていこうとする学生にとって前向きな志向となると考えた（下口他2019）。

他校では「保育実践演習」をどのような内容で開講しているのだろうか。Web上で閲覧できる「保育実践演習」のシラバスを概観する。和洋女子大学では、「保育士の使命感、責任とは」「保育士の倫理観」「保育士の社会性、対人関係能力」「現代社会における保育に関する課題」「保育内容等の指導力」といったテーマで、グループ討議、ロールプレイング、模擬保育、事例検討の手法を使って各回の授業を実施している。保育士として求められる像を描くような取り組みがなされていると考えられる。対して、山梨大学では「あそびうたは子どもたちと繋がる手段の一つ」「色々なあそびをみつけてみよう」「身近なものであそび道具

を作ってみよう」「あそびうた生ライブ」「いろんな遊びに触れた後の自分の気持ちを知る、見つける、伝え合う」「自分やってみる（ママ）」「他の人の遊びについてよかったことを伝え合う」「あそびうたの発表」といったテーマで、実際に遊びを体験し、オリジナルな遊びを考え実践することを重ねている。ここでは保育士として持つべき保育技術に焦点が当てられている。つまり各保育者養成校は、保育に関する専門的知識、技術、教養とは何かという問いかけをし、それぞれに定めたテーマで最終期に科目「保育実践演習」として授業展開をしている。

さて、Web 上のシラバスでは、本校のように「保育実践演習」において保育環境設定へ視点を向けた授業展開例は見つけることができなかった。では我々が保育士養成課程の最終期の科目「保育実践演習」において保育環境設定へ視点を向けた授業設定をしたのはなぜか。それは、保育士養成課程において、学ぶ機会が極端に少ない分野だと考えたからである。科目「保育内容（環境）」においても、その授業内容は植物や小動物、自然現象と子どもとの関わりといった内容で占められ、保育環境設定、という視点で授業が為されにくい。また学生は実習期間中に、環境による保育、と謳われているものの、自らが保育環境を創り出していく主体であるという視点を持ちにくい。環境が子どもの興味を呼び起こし学びに繋がるゆえ、環境設定こそが保育内容の方法であるという認識を育むための授業ができないだろうか、と考えた。

日本の保育の歴史を遡ると、敗戦後、救貧対策として保育所の設置とその内容の見直しに迫られ、1948年に児童福祉施設最低基準を制定している。注目すべきはこの最低基準は、保育のあり方について、子どもを中心にそれをとりまく環境として整備し与えること、およびその環境の中で子ども自身が生活し経験して身に付けていく、ということ、つまり子どもに対応した「環境」の重要性に着目して制定されたものであったということである（定行 2014）。我々は、戦後

の始原からあった「環境」への視点を学生とともに考え、今日的な在り方を具体的に作り出す授業をしたいのである。

本稿では、4 年生後期科目「保育実践演習」において取り組んだ「理想の保育園づくり」の授業実践と授業改革の内容を報告する。そのことによって、学生が保育を多面的に再考し、保育における現代的課題を検討する本科目の意義を提示することを目的とする。

## Ⅱ. 方法

下記 3 点（図 1）を到達目標として、科目「保育実践演習」において取り組んだ「理想の保育園づくり」の授業展開を対象とする。まず、2018 年度の「理想の保育園づくり」の実践を報告する。その成果と浮かび上がった課題から、授業改善に取り組み続けたことを辿り、2022 年度の実践に至る授業の変容を整理する。また、学生のレポート記述ならびに作品等の授業成果物から、学生にとっての学びを整理する。2022 年度履修生 49 名に対しては事前に全体説明を行い、授業成果物と授業の様子を記録した写真を使用する可能性があること、不都合がある場合には申し出るように口頭で説明を行った。さらに、各レポート書式には「この課題を個人が特定できないように配慮したうえで、授業研究等で使用する場合があります。不都合がある場合には申し出てください」との文言を添えて実施した。なお、本研究は、京都光華女子大学研究倫理審査（承認番号 166）を受け行ったものである。

- ① 4 年間の課程全体を通した学びの振り返り
- ② 保育に関する現代的課題について分析・検討を行う
- ③ 上記①、②をふまえて自己の課題を把握する

図 1 「保育実践演習」到達目標

### Ⅲ. 実践の展開

#### 1. 2018 年度実践の概要

2018 年における授業では、4 年間の学びを集大成させて表現する「理想の保育園づくり」を中心に、現代的課題の提示として「教員によるレクチャー」「子どもの発達と安全」学生心の成長を振り返る「成長の木ワークショップ」の 4 つの活動を行った。学生が「理想の保育園づくり」の活動を行う第 2 回から第 7 回については、90 分の授業を、教員による現代的課題提示としてのレクチャー 30 分、理想の保育園づくりグループワーク 60 分と分割して並行的に実施した（図 2）。

教員によるレクチャーの内容は、本学の 4 年間の教育課程の中であまり触れられて来ず、かつ現代的課題である事柄として、「海外（レジャ・エミリア/イタリア）の保育」「保育所保育指針 2018 年改訂のポイント」「園舎のデザイン」「特色ある保育」「地域における保育園の役割」「園における防災について」を取りあげた。海外の保育紹介からは、中庭やアトリエが隣接する保育環境やプロジェクト（注 1）と呼ばれる保育方法等に触れ、保育に対する視野が広がっていた。保育所保育指針改定については乳児保育の充実、幼児教育を行うこと、「災害への備え」「子育て支援」の項の新設について理解を含めた。まず、児童福祉施設最低基準について確認、園舎のデザインについては、仙田満の遊び環境論とそれに基づく園舎設計の紹介を行った（注 2）。特色保育については、「自由保育」「コーナー保育」などの保育形態や保育思想の紹介、その意義について再考を促した。

理想の保育園づくりの活動としては保育内容を表現するものとしてパンフレット制作、保育環境を表すものとして園舎模型制作を行った。パンフレットには、設置基準を踏まえた職員数や開園時間などの基礎情報、保育内容、保育方針、園の特色、一日の流れ、年間行事予定、1 か月分の園だよりを記載する事とした。

園舎模型については、気候風土、地域特性も含めて立地を設定、保育室の配置や園庭等について考え、440 mm×590mm の画板上に色画用紙で制作を行った。完成後、相互の作品を鑑賞する時間とグループごとの発表会を行った。レクチャーを反映して、中庭を設置したり、劇場などの行いたい保育内容に即した施設を

設置した園が多くみられた。パンフレット内容には「食育への取り組み」「異年齢保育」など学生が実習で見聞きして良いと考えたと思われるものや「0 歳から始める音楽・演劇教室」といった学生自身が興味を持って考えた保育内容が現れていた。

なお、13 回目には「自らの育ちを振り返る～成長の木」のテーマで、本授業のまとめ、および、4 年間の課程全体の振り返ると共に、今後の自己成長を木になぞらえて考えるワークショップを行っている。

#### 2. 2018 年度実践における課題

2018 年度の授業実践を通して、次の 3 つの課題が浮かび上がった。

##### (1) 情報の不足

学生が園舎設計を行う上で参考となる、魅力ある園舎、保育実践に関する先行研究・書籍・写真等が不足し、十分な情報提供が行えたと言え難かった。特に、園舎を考えるための具体的な事例の写真など視覚的な資料がほとんどなく、学生は参考資料がない状態で園舎の構造を考えることとなり、各自の考えをイメージすることが困難であったと推察される。そのため、2018 年度実施の園舎模型は図面のような平面的なものにとどまるものがみられた。

##### (2) 動線の想定不足

学生が園舎設計を行う際、特定のクラスの子どもが「朝、登園してから各保育室へ移動するまで」といった、限られた時間内に行う動きは想像することができた。しかし実際の保育現場では、乳児から就学前の子ども、さらには保育者・保護者が交錯・交流する。また、食事・排泄・午睡・外遊びといった、一日の活動の流れとともに、子どもや保育者が園内を移動していく。このような園にかかわる多くの人々が日々行き交う複雑な動線までは想像することができなかった。

##### (3) 発表と質疑応答活性化の必要性

2018 年度発表会においては、模型作品やパンフレットに表されている保育内容について、実際には各グループなりに考えを深めた部分があるにもかかわらず、発表では原稿を読み上げる形式的な園舎模型の紹介に終わってしまうことがあり、学びを十分に伝え共有するまでは至らなかった。また学生からの質問も、パンフレットや園舎模型について一問一答式で表層的な内容にとどまる様子が見られた。



### 3. 改善点

前項で挙げられた3つの課題に対し、それぞれ次のような授業改善を行った。

#### (1) 資料収集ならびに保育園への実地調査

園舎設計を行う学生に対し、より多くの具体的資料を提供できるよう、日本の魅力ある園舎設計ならびに保育実践に関する文献・資料収集を行った。さらにそのなかから、筆者らが実際に園見学ならびに関係者へのインタビュー調査を行う園として、6つの特色ある園を選定した。そして各園に調査協力を依頼し、2019年7月～9月に、園見学とインタビュー調査を行った(注3)(下口他2020)。この調査によって、6つの園がそれぞれの持ち味を発揮しながら、個々の子どものリズムを尊重し、子ども自身が興味・関心を持ち、十分に取り組むことのできる環境づくりをすべく、保育内容の改革に真剣に取り組んだことがわかった。つまり、魅力ある園舎は、保育内容の再考と併行して実現するものであること、また取り組みたい保育内容を実践するための保育環境づくりが園舎建築に反映されることを、筆者らは学んだ。

そこで、2019年度の授業から、レッジョ・エミリアの保育・園舎に加えて、上記6園の園舎とそこで行われている魅力的な保育実践について紹介した。

#### (2) 建築家とのコラボレーション

学生がより現実的な視点から園舎設計を行えるよう、建築に関して学ぶ機会を設けることにした。そこで同じく2019年度より、株式会社コアー建築工房、上垣内寛氏を外部講師として迎え、建築の観点から園舎設計について考える特別授業を実施した。授業では、建築素材や光や風の取り入れ方、天井の高さや空間の作り方など設計に必要な視点に加え、実際の保育園舎建築の様子も紹介された。その結果、学生の設計した園舎に子どもが実際に生活する場としての視点が加わるなど、大きな変化が生まれたように、担当教員には感じられた。

そこで続く2020年度は、授業終了後の担当教員間での振り返りにも、先述の上垣内氏を講師として招き、担当教員とともに学生の作成した園舎について検討してもらった。その際の討議において、同氏のコメントが非常に有意義で、保育に新たな視点をもたらすと感じられたため、2021年度以降は、同氏に学生の園舎発表会にも参加を依頼し、学生の作成した園舎に対し

て直接、講評をいただいている。

#### (3) 授業の整備・工夫

2020年から始まったコロナ禍によって、本授業もこれまでの授業形式を変更せざるをえなくなった。具体的な変更としては、対面授業の回数を絞り、限定された期間に集中講義として実施した。加えてオンデマンド授業を実施し、学生に振り返り課題などの提出を求めた。

さらに、この授業に対する学生の理解を深めるため、授業時の説明や授業順序にも変更を加えた。まず、本授業の到達目標に向けた「理想の保育園設計」の活動であることをより明確に学生に示し、毎回の授業が園舎設計という課題に結びついた内容であることを伝えた。それによって学生が、園舎設計にどのように活かすのかという視点を常に持ちながら、授業に取り組めるようにした。また授業の実施順序にも次のような変更を加えた。2021年度までは、授業の最終回に京あんしんこども館(注4)の見学を行い、これまでの総まとめとして、子どもの安全な環境づくりについて学ぶ機会としていた。しかし、そこで得られた知見も園舎設計に活かすことができればという願いから、2022年度は園舎設計の活動が始まる前に、京あんしんこども館の見学を実施した。

すなわち、①京あんしんこども館への見学、②海外や日本の魅力的な保育園舎・保育実践の紹介、③建築家による保育園設計についての講義、④グループでの制作活動(理想の保育園の園舎模型とパンフレット)、⑤各グループによる発表と講評、⑥振り返り、という流れである。このように段階を踏んで授業を展開させた。教員によるレクチャーについても、常に時流に照らし合わせて内容の検討と再構成を行った。②③をレクチャーに含めるとともに、「防災」については例年保育現場で何らかの事故や不審者侵入等のニュースがあったことから、「保育現場での事故予防」「防犯」を加えた。

課題(2)動線の想定不足に対しては、6つの特色ある園紹介の中で、各園で行われている動線の工夫について、靴箱や水場の配置、保育室の配置、仕切りの工夫、排泄の働きかけとトイレの配置、遊びの動線、といった園児の動きと保育者の働きかけについて意識した解説を行った。また、建築家のレクチャーの中でも回遊構造についての説明があった。さらに、制作時

の工夫として竹ひごの先に園児・保育者をイメージした小人形を制作して動線への意識づけを行った。

そしてこれまで、⑤の各グループの発表と質疑応答が、園舎模型やパンフレットの説明とその確認に終わってしまうことが課題（3）としてあった。原因の1つに、発表に合わせて園舎模型の詳細を提示することができないという問題があった。そのため、聞き手の学生は園舎の具体的な姿を想像することができず、発表後の質問が園舎の状況確認に終始してしまっていた。

そこで2019年度以降は、発表時に模型だけでなく、紹介したい模型部分を写真で撮影し、教室のスクリーンに提示するようにした。また必要に応じて、スマートフォンやiPadのカメラと教室のスクリーンをつなぎ、その場で模型の細部が提示できるように工夫した。それによって各グループの発表は、発表者にとって説明しやすく、聞き手にとってもわかりやすいものとな

った。

また、質問の内容を深めるため、発表前に各グループの園舎模型を見学できる時間を設け、学生が感想や質問をあらかじめ考えておけるようにした。加えて、各グループに対して、感想や質問を述べるグループを事前に指定しておき、担当グループの園舎模型をよりしっかり観察しておくことを勧めた。

以上のような授業改善を重ね、2022年度には図2のような授業校正となった。

学びを確認するための課題として、4回のレクチャーが終了した11月5日（土）授業後に下記内容の「レクチャーレポート」（図3）を課している。

レポートにおける学生の記述から、改善点（1）収集した資料ならびに調査結果の提示（2）建築家による授業を通して学んだことに対する学びについて抽出する。

2018年度授業構成

回	内容
1	「理想の保育園を作ろう」概要説明／グループ分け、ファイル制作 多様な保育を知る～レッジョ・エミリアのDVD視聴
	<b>教員によるレクチャー(30分)</b> <b>学生による制作活動(60分)</b>
2	新保育所保育指針について
3	園舎のデザイン
4	園の特色
5	レッジョ・エミリア動画視聴
6	保育園の地域における役割
7	防災について
8	課題①②の完成・提出
9	パンフレット製本／パンフレット・園舎鑑賞会／発表準備・練習
10	作品の発表会・質疑応答①4グループ
11	作品の発表会・質疑応答②4グループ
12	作品の発表会・質疑応答③1グループ 「理想の保育園作り」まとめと振り返り
13	自らの育ちを振り返る～成長の木
14	京あんしんこども館見学 「子どもの発達と安全」
15	

2022年度授業構成

回	内容
1	ガイダンス・15回の授業の意義・内容説明
2	学外見学 京あんしんこども館見学 「子どもの発達と安全」
3	多様な保育を知る レッジョ・エミリアの保育 動画視聴
4	建築家による特別講義 『子どもの育ちを支える住環境・園舎』
5	保育園事例紹介①～⑥
6	新保育所保育指針・設置基準・防犯/防災/事故)
7	課題①：理想の保育園を考え、園のパンフレットを制作する
8	課題②：4つ切りサイズの画用紙を園の土地と見立て、園舎（園庭を含む）を制作する
9	
10	
11	作品の鑑賞会・発表会・質疑応答①3グループ
12	作品の発表会・質疑応答②4グループ 講師による講評
13	作品の発表会・質疑応答③4グループ
14	4年間を振り返って～成長の木
15	全体の総括



図2 授業構成の変化

- ◎ 11月5日の授業のうち1、3、4時間目から学んだことを書きましょう  
 1時間目：レッジョ・エミリアの保育／3時間目：保育園紹介／4時間目：安全のために  
 ◎学んだことの中から次回の保育園づくりに活かそうなことを書きましょう  
 ◎2時間目 特別講義 を受講して発見したこと、新たに学んだことを書きましょう  
 ◎次回の授業では、どのような保育園を作りたいですか。展望を書きましょう

図3 レクチャーレポート課題

### (1) 収集した資料ならびに調査結果の提示

学生は、特色の異なる6か園の紹介を受け、それぞれの園に地域性、特色、保育方針があり「子どもたちにどのように育ってほしいかなどを明確にし、その理念や保育に合わせて園舎や環境を整えているということだと感じました」「保育の中で大切にしたいことがいろいろな形で取り入れられている」と保育内容とのつながりに気づいた。

自然豊かな土地に子どもの遊び環境を重視し、保育室内にロフトを設けた園、園舎に木をふんだんに取り入れている園、トイレを暗く冷たいイメージから、明るく保育室と緩やかにつながった空間に改修した園、日本の伝統的な生活様式を大切に、畳敷きの和風建築となっている園、回遊構造を持ち、園児の遊びがスムーズに行われるように園庭の改良を続けている園、モダンな現代的な建築の中に色彩と光を取り入れた園の6つの園を提示したが、異なる特徴を持つ個性豊かな園について写真を用いて視覚的に提示したことは、学生にとっては新鮮な驚きであり、その後の理想の保育園づくりの手がかりになっていた。

各園に共通する工夫として、「高さへの配慮」「冒険と安全の両立」「境の場の重視」「時間や光への着目」を挙げた。「高さへの配慮」については保育室内のロフトやスキップフロアとその活用方法について紹介した。学生は「ロフトがあることで子どもたちどうしの関係、ルールや新しい遊びなど様々な経験ができると考えます」「子どもの目線や行動を意識して物の高さなどを配慮することが大切」と高さへの意義を見出すとともに「幼児の部屋にはロフトがあり一見危なそうに見えるが、子どもたち自身で経験していくことで達成感が味わえる環境が作られていると感じた」と冒険心を満たす環境の大切さについて述べている学生もいた。

「境の場」として保育室と園庭をつなぐ庇とウッドデッキ、靴箱・水場の配置について紹介したが、学生にとっても動線を考える一助となり、「乳児棟の保育室前に幅広のウッドデッキを設置したい」と実際に自分たちの園に取り入れているグループもあった。「明かり・風・色を感じられるように影や窓、光に着目して園の設計がされていることがわかりました」と光を意識した園舎設計も見られた。

また、日本の6か園の報告とレジヨ・エミリアの

保育紹介の両方を行ったことによって、海外の保育への関心を高めると同時に、「日本の園でも独自の取り組みをしている」と受け止め、日本の保育と海外の保育の比較や、日本の保育は海外にどのように受け止められているのか知りたいなど、日本と海外を比較して考察する記述も見られた。

### (2) 建築家によるレクチャーを通して学んだこと

建築家のレクチャーによって気づきを得たことがうかがえる記述が見られた。例えば、学生はこれまで何事も子ども中心で保育を考えがちであったという。しかし、園舎設計の際に「まず保育者の動線を考える。それを考えてこそ子どもの動線が考えられる」という建築家のコメントに接し、保育者のゆとりが保育の豊かさにつながることに気づかされたという。

また、一日の変化や季節の移ろいに眼差しを向ける必要性を学んだというコメントも見られた。

さらに、設計の視点を知り、園舎の形には意味があること、また園舎だけでなく、「園舎の素材や光の入り方も保育環境に含まれる」ことに気づいた学生もいた。

このように授業に、建築家による講義・講評の時間を取り入れることで、学生は新たな視点から園舎設計について考えられるようになった。すなわち、子どもと保育者の双方の動線を考えるとともに、一日のうち、そして季節によっても変化していく光と影の動き、建物内の風の動きなどにも注意を向けるようになった。

## 4. 2022年度における学生の学び・成果

### (1) 2022年度におけるグループ活動の実際

2022年度はまだ感染防止策をとった上での対面授業を設定しており、本授業においてはグループ活動をするため11月19日(土)に4講時連続の集中講義の形で行った。グループはゼミメンバーを基本として、4～5名であった。11グループのうち7グループは保育実習室において、4グループは図工室において、グループ活動を行った。

園舎模型は440mm×590mmの画板の上に作っていった。色画用紙、方眼紙、薄紙、木目シート、色ペン、はさみ、のり、セロテープ、は自由に使えるように準備した。また、動線を確認するための小さな人形を作るために竹ひごも用意した。

園紹介パンフレットは、A3サイズの白用紙を使い、



園の概要、保育方針／保育目標、保育の特徴、保育の内容、一日の流れ、年間行事などを記載するように指示した。出来上がったパンフレットは、A3サイズを二つ折りにしたもの、三つ折りにしたもの、観音開きにしたものがあった。

各グループでは話し合いながら、これら2つの課題作成に取り組んだ。多くのグループは4講時の終了時刻間際まで取り組み、仕上げた。グループの代表者が、園紹介パンフレット画像、園模型写真（全体）、園模型写真（工夫した細部）をオンライン授業サポートシステムのロイロノートに提出した。これらの画像を用いて発表会を行うためである。

## (2) 2022年度における発表会の実際

発表会は12月10日（土）に3講時連続で行った。その2講時目に、レクチャー担当の建築家に再度来ていただき、講評を頂いた。レクチャー内容を反映した特徴的な園づくりをした3グループの発表を下記に取り上げる。発表時のコメントと、後の総括レポートにおいて記載している内容を記す。

### a. しあわせ保育園

「しぜんの中であそびながらわらってせいかつする保育園」を保育方針として、それぞれのフレーズの先頭の文字をとって園名も定めている。自然を志向し、木造園舎で、季節の移ろいを感じながら生活を重ねたいという願いのもと園づくりをした。「乳児、幼児にとって保育室や園舎は第二の家」であり、毎日の生活の積み重ねを大切にしていることが、一日の流れを中央に記したパンフレットからも読み取れる（図4）。そこで考えたのは、生活リズムや活動量の異なる乳児と幼児の保育室を、どのように配置するか、ということだった。二階建てにして、乳児の保育室を出入りしやすい一階部分に配置するのか、または午睡時に静寂を保ちやすい二階部分に配置するのか、または平屋にして日当たりの状況を同じにし、園児同士が会いやすくなるか、といった議論を重ねた。しあわせ保育園は平屋で建てることにし、乳児棟、幼児棟は中庭を介して行き来できる配置にした。そして、ガラス天井で明るく仕上げた。絵本の部屋は別棟に設定し、落ち着いた雰囲気を楽しめる空間にしている。ホールの前に広くとった園庭には、シンボルツリーが立ち、うさぎ

と触れ合い、小池の魚を観察できるようにしている。園庭遊具は少なく設置されている（図5）。「園舎を作る際に実際の保育をすることを想像して作ることが大切だと学んだ」と感想を書いているように、グループ内では時間ごとの子どもの動線を考え、意見を出し合って作業を進めたことがわかる。

この園舎の特徴は、日当たりを意識したガラスの天井であろう。園舎模型が出来上がった際も、満足していた。しかし発表会では、「夏の気温上昇対策はどうか」「明るすぎて落ち着かないのでは」といった感想、意見が出された。季節、時刻による日照の違いへ注意を向けることへの気づきがあった。また、明るいことが良いこと、といった価値観のみならず、多様なトーンで生活の場として整えていくことにも気づいた。

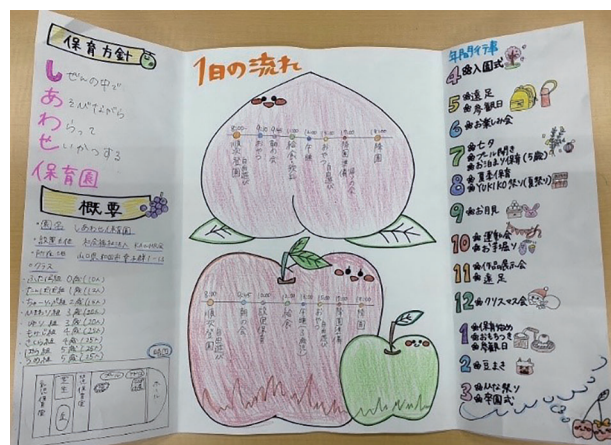


図4 しあわせ保育園パンフレット



図5 しあわせ保育園 園舎模型

### b. あひる保育園

「元気で明るい子どもに」「『ありがとう』『ごめん』が言える子どもに」「健康な体と感性を持つ子どもに」

という保育方針のもと、広い園庭でのびのびと体を動かして遊ぶことができるように考えられた園である(図6)。半円形、二階建ての園舎は3～5歳児が過ごす幼児棟、正方形で木調の二階建ての園舎が0～2歳児のための乳児棟としている。幼児棟一階円形の外周側に玄関を設け、そこから左右に分かれて各部屋に入っていく動線となっている。玄関正面には園児の交流を促すためのホール、保育室と保育室の間にはトイレがあり両方から入れるように考えられている。また、保育室近西側に画材室を設定しているが、これは保育者がすぐに材料を取りに行けるように働きやすさを考慮したものである。同東側には図書室を設置、園児が絵本に触れやすく考えられている。円形の内側は園庭となっているが、保育室と園庭の境部分には庇のあるウッドデッキを設け、屋内と屋外をゆるやかにつないでいる。二階には「遊戯室」「プール」「アトリエ」「プラネタリウム」といった活動に使用する部屋が設置されている。

四角形の乳児棟は乳児が匍匐することから1、2Fともに畳敷きのスペースが大きくとられている。大きな円形窓を配し、採光の工夫がみられる。

2つの園舎の間にある園庭には季節の樹木が植えられ、真ん中は広くスペースを取り、図右側に体を動かす遊具が設置されている。「安心して自然に触れ、体を動かすことができる半中庭のような園庭」を目指したものである(図7)。

乳児棟と幼児棟が分離されている点が最も大きな特徴であるが、この考えに至った経緯としては、これまでの大学における学びと実習で年齢によって心身の発達による運動や一日の過ごし方が、乳児と幼児では大きく異なることを目の当たりにしたことによって発案したとのことであり、子どもの発達をふまえた保育の内容を園舎設計に反映させたものとなっている。

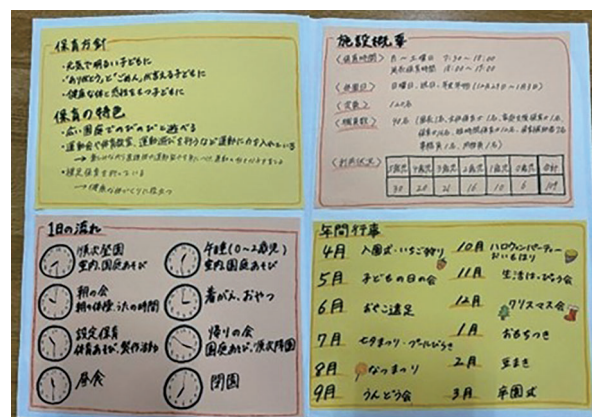


図6 あひる保育園パンフレット

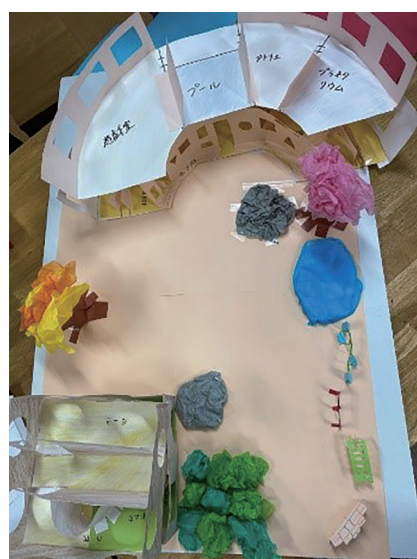


図7 あひる保育園 園舎模型

### C. おひさま保育園

この保育園は、滋賀県草津市の琵琶湖沿いに設定した園児数約100名の園である。保育目標として「思いやりのある子」、「あいさつのできる子」、「のびのびと元気よく遊ぶ子」の育成を掲げている。園を紹介するパンフレットには、園舎の特徴として「大きな庭があり、緑を感じながら思いっきり体を動かせます」、「大きな窓があり、太陽の光をたくさん感じられます」、「生き物のいる池があり、中の様子をのぞくことができます」と書かれている(図8)。





図8 おひさま保育園パンフレット

園舎模型の全体像が図9である。園舎は二階建てで、一階部分で3～5歳の幼児が、二階部分で0～2歳の乳児が生活するようになっている。園舎模型は、曲線部分が含まれた複雑な構造であるにもかかわらず、一階部分と二階部分がきちんと接合しており、模型として完成度の高い。



図9 おひさま保育園 園舎模型全体像

このグループでは、最初に iPad を駆使して設計図を作り、全体像をメンバーで共有した上で模型を作成している（図10）。

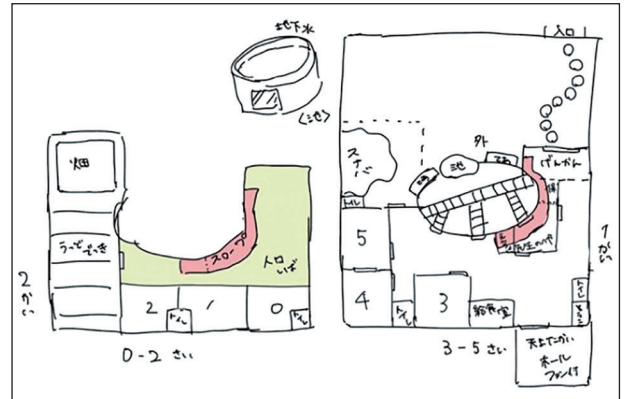


図10 おひさま保育園 園舎設計図

学生によると、園舎のこだわりは、園舎と園庭のあいだに位置する「中庭」であるという。中庭がある一階部分の様子を示したのが、図11である。中庭と園庭（外の空間）は壁によって区切られているため、外から中庭の様子は見ることはできない。しかし、園舎と中庭のあいだは大きな窓（ガラス）で区切られているため、園舎の中にたくさんの光が取り込まれるとともに、子どもが外の様子を見られるようになっている。また一階にある幼児の保育室から中庭に出やすいよう、保育室が配置されている。中庭にはブリッジが設けられ、子どもが園舎からブリッジをたどって庭に出られるようになっている。中庭と園庭の境界部分に池が設けられ、池は中庭の一部であるとともに、園庭の一部にもなっている。



図11 おひさま保育園 園舎一階部分

乳児が生活する2階部分（図12）には、人工芝が

敷き詰められたスペースがある。室内庭のような空間で、1階の中庭同様、大きな窓で囲まれているため、外の光を室内に取り込むとともに、室内から外の様子が見られるようになっている。さらに2階部分には、ウッドデッキが敷かれた庭と畑があり、乳幼児が安全に外の空間に触れ、自然に親しむことができるようになっている。



図 12 おひさま保育園 園舎二階部分

園舎発表会では、建築家の上垣内氏から、作成された園舎模型について2つの質問があった。一つ目は、「琵琶湖が園のどちらの方角、向きにあるのか」という問いである。この質問は学生にとって予想外であったようで、学生は驚いていたものの、「中庭の窓が向いている」方向と答えている。上垣内氏によると、もし中庭と園庭のあいだの仕切りもガラス張りであれば、中庭の池の向こうに「琵琶湖」が見えることになる。それによって、中庭の池に、琵琶湖とのつながりが生まれると同時に、琵琶湖とは違う池としての面白さが出てくるとのことであった。上垣内氏の指摘は、園舎設計を考える時に園内の構造だけでなく、園舎とその土地、風景とのつながりを考えていく必要性を教えてくれる。

二つ目の質問は、一階にある中庭の動線に関するものであった。模型（図 11 参照）をよく見ると、中庭と園庭のあいだ（図 11 中庭の左下あたり）に出入り口が1つ設けられている。ということは、内である中庭と外である園庭の行き来が可能ということである。

そのため、上垣内氏から「中庭は外から靴で入っているのか」、「この保育園は外靴で入れるのか？」という確認があった。学生は、玄関で上靴に履き替える二足制を想定していたが、このままでは、中庭の中で「上靴」と「外靴」の使用が混在することになってしまう。上垣内氏の問いによって、室内から中庭に出る動線、つまり「子どもが室内から上靴で庭に出る」可能性だけを考えていたことに気づかされた。中庭の出入り口をめぐる討議を通して、学生は、靴箱の位置によって動線が変わるということを学んだ。

さらに上垣内氏からは、園舎から伸びるブリッジについても言及があった。ブリッジを置く場合は、ブリッジの「行き先に何があるのか」を考えて設計するという。しかし、現在のブリッジの置き方だと、3つあるブリッジの行き先がすべて同じ場所、池の前1か所になってしまっている。各ブリッジの行き先が池、中庭など選択できるほうが、子どもがより楽しめるのではないかという指摘であった。同氏の指摘は、子どもが見ている世界、そして子どもの視点に立ち、子どもの考えや行動を想像することの大切さを改めて教えてくれたように思われる。

講評の最後には、乳幼児の活動場所をあえて2階にしたことについての評価があった。年齢が低い場合、子どもは園舎や園庭から一人で出ていくなど、保育者にとって想定外の動きをする危険性がある。子どもがどこにでも自由に動き回れるようになると、それを見守る保育者の負担も大きくなり、余裕のない保育になってしまう。そのため動線をつなげるのではなく、「区切る」ことによって、子どもが活動する場所を保育者の目の届く範囲におさまるようにする。それによって、子どもは保育者によって守られた領域のなかで遊ぶことができ、保育の質を高めることができるという。

では、この「おひさま保育園」を作成した学生にとって、今回の園舎設計や発表会はどうのような体験だったのだろうか。学生の振り返りから、保育園を設計し、建築家からコメントをもらうことは、「普段できない貴重な体験」であったという。そして上垣内氏のコメントを通して、理想を形にすることの楽しさや難しさ、設計の際に「メリット・デメリットをしっかりと考えることの大切さ」を知ることができたと述べている。また時には「理想の園舎が現実にはできそうにないと感じ



じること」もあったが、建築家が提案する「ちょっとした工夫や専門的な建築の技術」によって、新たな可能性が生まれること、そこから「諦めないこと」の大切さを感じたという意見もあった。

さらに、次のような気づきも報告された。学生は最初、「光がたくさん差し込む明るい保育環境に魅力を感じて」いたという。しかし授業を通して、「光が差し込みすぎると暑かったり、落ち着かなかったりする場合がある」こと、保育園には子どもが元気に活動するだけでなく、「落ち着けるような」場所も必要であることを学んだという。そして保育園は「子どもたちにとって第二の家のような場所」であり、「子どもたちにとっても保育者にとってもより良い保育園を様々な角度から柔軟に考えながら、追求し続けていきたい」と述べている。

以上3つの園について、学生の成果物から読み取れる学びを詳細に述べた。それぞれの取り組みにおいて、授業内のレクチャーで学んだ視点が随所にみられるだけでなく、授業や実習経験に基づく実践もみられ、本科目の到達目標である実習経験を含む「4年間の学び」を反映させた内容となっていた。

#### Ⅳ. 2022年度のレポートからみる学生の学び

すべての活動が終了した12月10日(土)授業後に、下記のような授業全体を振り返る「まとめのレポート」を行った。1, 2, 3は本科目のねらい①②③に対応した設問である。また本授業は最終の合同授業であることから、自由に授業を振り返ってほしいと考え、4, の欄を設けた(図13)。

これらのレポートは、word文書で記載し、オンライン授業サポートシステムの光華ナビによって提出を

求めた。下記に学生の記述から「保育実践演習」で学んだことをまとめる。

第一に保育環境づくりへの視点が開かれたことが挙げられる。学生の記述の主なものを表1に挙げる。これまで、子ども理解について学び、実習では保育計画を実践することに懸命であった学生にとって、子どもが興味を持てるような環境構成や保育者が保育を行いやすい設計について、模型を立体的に作ることによって気づくことができた。それは、なじみのなかった設計という視点から学んだことが大きいことがわかる。建築家のレクチャーは園舎づくりに特化した内容ではなかったが、子どもの感性への配慮や保育者の働きやすさを考慮した物的環境について建築家が考えを提示してくれた。このことによって学生らは園舎を含む保育環境について思考する機会となった。このことは意味深い。

第二に保育内容への関心が挙げられる。学生の記述の主なものを表2に記す。保育環境が保育内容と結びついていることを学んだこと、海外の保育を見て視野と興味を広げたことと関わりが大きい。子どもにとって、というのはもちろんのことであるが、保育者にとっても動きやすい環境づくりを追求し、毎日取り組んで楽しいと思える内容に改善していく姿勢が必要となる。これら2点について、今後も問題意識を持ち続け、学び、情報を得て、自分の保育観としていってほしいと願う。

第三に、保育像を描いたことである。学生の記述の主なものを表3に記す。それはこれまでなじみのなかった建築分野の話を聞き、レクチャーで6園の園舎を見た。特徴ある園舎で特徴ある保育が為されているその実際を見たことによって、自分が理想とする保育、というものを考えなおす機会となった。これまでの学習、実習体験とも照らし合わせて、してみたい保育像

1. 理想の保育園を考える際に、4年間の授業や実習で学んだことを、保育実践演習の授業でどのように活かしましたか。活用したことや参考にしたことがあれば具体的に教えてください。
2. 今回の授業では保育における現代的課題として、「園舎を含めた保育環境」についてとりあげました。園舎・園庭・保育室などを含めた保育環境について、あなたが新たに気づいたこと、知ったこと、学んだことがあれば具体的に教えてください。
3. 今回の保育実践演習の授業で学んだことを、今後、保育者としてどのように活かしていきたいですか。あるいは、どんなことを大切にしていきたいですか？
4. この授業全体の感想などを自由に記述してください

図13 まとめレポート設問



表1 「保育環境づくり」に関わる記述

項目	抽出ポイント	学生の記述
保育環境づくり	保育環境	実習などに行っても、子どもとの関わりや言葉がけのことばかり考えていた。それだけではなく、子どもが豊かに育ち安全に配慮した見守りやすい保育環境を作ることが大事だということを知ることができた。
		4年間の授業では、子どもの気持ちや子どもの意図を考えることが多く、実習では逆に保育者の目線で考えることが多かった。今回の活動ではこの両方の視点が大切だと感じた。
		保育環境は保育室内だけでなく園舎全体のことであると学んだ。
		園舎や園庭の各部分に意味があることを学んだ。ものがそこにある意味を考えながら保育をしていこうと思った。
		実際に園の模型を立体的に作ることで、具体的な工夫や環境構成について考えるころができてとても面白かった。
		ブロックを探す音はとても大きく耳が痛くなることもある。マットを敷いて衝撃を吸音し、子どもと保育者の耳を守るためにしていると気づいた。
	設計という視点	光と影を取り入れてイメージーションを広げたり、内装木質化し、畳、障子、ふすまを基調とした和室で安心した居心地を感じることもできる。
		建築に使われる素材について知ることができ、制作活動が楽しみになった。
		木を使って園舎を作ることによりリラックス効果があることや、太陽の光や風の通りを考えて園舎を作ること学んだ。
		これまで保育園の園舎のことを考えたことがなかった。理想の園舎の考えが膨らんだ。
		園舎を考えるなんてなかったもので、とても面白かった。希望を形にするものの難しさや楽しさを知った。
		建築素材という新たな観点を得ることができた。

表2 「保育内容の関心」に関わる記述

項目	抽出ポイント	学生の記述
保育内容への関心	保育環境と保育内容の関連	それぞれの園に強い特徴があり、保育の中で大切にしたいことを取り入れている。
		良い環境の下で、子どもが生活できるように場を考える必要があることを学んだ。
		保育者に対しても、行動しやすく働きやすい園舎であることが大切だと学んだ。
		働きやすい環境を作ることが、良い保育につながると考えた。
	世界のさまざまな保育	子どもたちに経験させてあげられる面白い方法があることを学んだ。
		アトリエという専用の部屋が配置されていることは、日本ではあまりないので興味深かった。

表3 「保育像」にかかわる記述

項目	抽出ポイント	学生の記述
保育像	理想とする保育像	建築の話や全国の保育園を見て、自分の理想の幅が広がった。
		大学の授業で学んだこと、実習で体験したことをもとに、自分の理想の形の保育や園舎を考える中で、自分の理想とする保育像が明確になったような気がする。

を描くことができた。

第四として、ゼミグループで活発な活動ができたことである。学生の記述の主なものを表4に記す。「意見を実際に模型作りに取り入れることはできなかったが、共有し合えたことはよかった」と、グループ内で意見を出し考え合い、保育の理想を探る時間であったことがわかる。また、ゼミを基本としたグループで充

実した交流であったことがわかる。学生らは2年生の時期にコロナ禍に巻き込まれた。オンライン授業になってしまい、交流が断たれ、緊迫感の中で実習を実施した学年である。それゆえ、2022年度4年次後期にグループ活動を行い、仲間と共に園舎模型やパンフレットといった成果物を創るプロセスそのものが貴重であったことは想像に難くない。発表会において、討

表4 「グループ活動」に関わる記述

項目	抽出ポイント	学生の記述
グループ活動	グループ討議	実際に模型作りに取り入れることはできなかったことでも、グループの人たちと共有し合えたことはよかったと思う。
		理想の保育園をグループのメンバーで話し合って作り、保育方針を決めたことは楽しかった。他の人たちの意見も知れて良かった。とても思い出に残っている。
	交流	グループでの活動がとても楽しかった。
		グループワークがあったから、卒業前に思い出作りができた。
	発表会	自分のグループにはなかった意見や工夫点を聞くことができた。

議したことも含めて、この「思い出」が、今後の歩みの足場になっていくだろう。

その他、授業のねらい③の自己課題の明確化として、「4月から保育現場に立つ実感がどんどん湧いてきた」、「担当するクラスの保育室づくりが、もうすぐ私たちには求められている」と、保育室づくりに取り組もうとしている記述が見られた。おそらくは4月から始まる新人保育者としての歩みに不安を感じながらも、このように前向きな姿勢になっていることがわかる。「4月からの自分の形を明確にするような授業」であり「希望を形にすることの難しさと楽しさ」を味わったのである。

## V. 考察

### 1. 授業改善による変化

2018年度から2022年にかけて、授業実践から浮かび上がった課題と経年による現代的課題の変化に対応して、情報の収集、授業方法の工夫、レクチャー内容の改善を行った。情報収集と資料提供については、6つの特色ある園舎紹介と建築家による講義を行ったことによって、学生は新しい視点を得て、自らの理想について具体的に考え表現するための手がかりを提供できた。授業方法の工夫については、15回の組み立て、動線への意識付け、発表活性化への工夫を行った。15回の授業の組み立てについては、初期はレクチャー内容を理想の保育園づくりと並列的に分散させる方式であったが、徐々に内容が整理され、情報収集のステップとして集約し、段階的に提示することで分かりやすさを増した。園舎模型が立体的なものになってきたことに加え、動線への意識付けのために、事例を示したことと作りながら動線を確認する人形を導入したことによって、単純な出入りだけでなく、廊下や多目的室

による園児の交流、トイレと保育室の関係など、より複雑で保育現場で実際に行われている動線を想定することができていた。発表の活性化については、タブレット等のICT機器の導入、ロイロノートの活用によって、視覚的に示しながら口頭発表できるようになったこと、鑑賞の時間を設けること、感想や意見を述べるグループをあらかじめ指定したことによって、各グループが制作した保育園への理解が深まり、議論も応答的に行われるようになった。レクチャー内容の変化については、その年に起こった保育関連の事故に関連付けて事故防止や防犯について触れることで学生にとってより身近で将来的に保育者となった際に起こりうる内容として考える機会となった。

### 2. 本学における科目「保育実践演習」の意義

厚生労働省によって示される科目の目標、内容に基づいて、いずれの保育者養成校も、科目「保育実践演習」の具体的内容と展開については模索していることがうかがわれた。そのような状況の中、本学では、保育環境設定に視点を当て、園舎を概観してその中での子どもの活動と保育者の援助について思考する授業を作り出してきた。保育内容を吟味し、それが行われる園舎環境を設計するという演習と発表討議を通した、本学における科目「保育実践演習」の意義を、授業の到達目標に照らしてまとめる。

まず、到達目標①4年間の課程全体を通した学びの振り返りに関する事項を挙げる。学生は専門科目として幼児教育・保育関連科目の履修を続けたわけであるが、本学の場合2年次後期から1年半の期間をかけて複数回の実習を行う。実習は学生にとって、学習したことを実地経験し、学習した知識を子どもとの関わりの中で確認し、自らが考えた方法で子どもたちに働きかける経験であった。いわば、育てられる者から育て

る者へと転換をしていく時期であったと言える。そのような時期を経た4年次後期に、4年間の課程を振り返り、これまでの学びと経験を基にして自らが保育者として保育を計画実践すること、1年を通した保育を想定することにつなげていく。本授業において、やってみたい保育、保育方針、その具体的計画として年間行事と、一日の過ごし方について、仲間と共に話合った。多様な意見をもとに討議を重ね、グループで一つの趣旨に定め、そのような保育園を作るべく園舎設計を考えた。子どもの活動動線を想定しながら保育室、その他の部屋の配置を考えた。4年間の学びと経験を集大成させて子ども中心の保育のあり方を精一杯に探究したと言える。

到達目標②保育における現代的課題について挙げる。保育所保育指針では、「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動」できるように「環境による保育」が謳われている（厚生労働省 2017）。保育園においては、子どもが保育室内外の物的環境から興味を掻き立てられ、主体的に取り組むというあり方を追求する必要がある。しかし、保育現場では、保育者主導の集団一斉保育がまだまだ多い。我々は、「環境による保育」の実現を、保育における現代的課題であると捉え、理想の保育園を作るという演習の中で保育者の配置と役割、物的環境、保育計画、保育技術の再考をした。「保育現場での事故予防」「防犯」に加え、奇しくも近年複数事例報告されている「不適切保育」についても、現代的課題として取り組む必要がある。これも保育環境の抜本的改革なしには改善の期待はできない。

到達目標③自己課題についてまとめる。学生は、保育者になる日が近づき、着任後には保育室づくりが最初の課題となると捉えている。この自己課題の設定は、実習中には考え及ばなかったことであり、保育者になる実感をしていることを表している。また、本稿では詳細を触れていないが、続く回での「自らの育ちを振り返る～成長の木」のテーマの授業において、保育者になる決意と抱負、および今後の自己課題を言語化して表している。

本授業の特徴として、仲間と交流しながら以上の学びを重ねた。グループ討議、作業での濃密な思い出は、今後それぞれが任地に着いたときの自己の支えとなっていくだろう。

このように、保育環境設定に視点を当てた「保育実

践演習」は有意義であったと言える。

### 3. 園舎設計を通して保育を多面的に再考する可能性

今回の授業において、学生は建築の初歩的知識について学び、園舎の立体模型を作り、建築家からの評価を受けた。それは子どもと保育者が過ごしやすいかどうか、という視点であった。人が「居る、集う」空間について考え、つくりあげるという建築的視点の視野を広げるとともに、保育とは異なる視点を通して保育に対する理解を深めることができた。学生の4年間をふりかえってみると、入学時はどうしても「子ども」だけに視点が固まってしまう、保育者の動きや関わり、保育室という空間には、目が届かないことも多い。それが大学での講義を通して、限られた時間内の保育者と子どもとの、その時の活動の場としての保育室や園庭など、園の一部の空間へと視野が広がってくる。さらに実習を経験することによって、保育の一日の流れから一週間、一か月の流れへと、時間的な視野が広がるとともに、保育室・園庭から食堂やトイレ、玄関など、園舎内の空間的な視野も広がってくる。しかし、それでも学生にとって、担当クラス以外の子どもや保育者の動き、保護者や園の訪問者の動きを想像することは、かなり難しい。また、園内の季節の変化を想像することも、学生にとっては難易度の高い課題であろう。保育園にかかわるあらゆる人々の動きを想像し、保育園の一年を想像する。学生にとって、その最初のきっかけとなったのが、この園舎設計という課題だったのではないだろうか。

また今回の授業を通して、建物という形に込められた思いや願いを読み解く力を学生が身につけていくこと、そして「与えられた空間」の中で保育を展開するという受動的な姿勢から、自分の保育を展開するための道具・方法として空間を用いるという、より積極的な姿勢へと変化していくことが、筆者らのもう一つの願いである。

加えて、筆者ら（2020）がすでに指摘したように、「1960年代～1970年代に取り組まれた、保育所運動時代に建てられた保育所」が今、建て替えの時期を迎えている。それゆえ、学生が卒業後、勤務先の保育園の改築や改修を経験する可能性もある。園舎建築は、最善と考える保育内容を実現する保育環境への改善の機会となる。それゆえ、保育者が園舎建築に際して、



主体的に意見を発し、関わっていくことが必要となる。この責務は大きい。なぜなら園舎は、保育における現代的課題に対応して造られ、今後 50 年間の保育が行われる場となるからである。

#### 4. 今後の課題

4 年間の課程全体を通した学びの振り返り、および保育に関する現代的課題について分析・検討する科目「保育実践演習」において、「理想の保育園づくり」を通した学修が意義あるものとなっていることを提示できた。

今後、本授業で取り入れたい視点は 3 つある。一つ目は海外の特徴的な保育の紹介である。本授業において、学生らは海外（レッジョ・エミリア）の保育に対して関心を高めた。子どもの表現をアートと捉え、表現活動を引き出すような環境設定の工夫と、その実際について、魅力を感じたのである。つまり、レッジョ・エミリアの保育実践に、日々の保育を改善していく機動力があると感じたことだろう。今後は、乳児保育における育児担当制や、人的環境を含む環境設定の構造化を目指すハンガリーの保育についても紹介していきたい。ハンガリーの保育については特に、大型楽器を使わず肉声での歌いかけによって行う音楽教育があることを学生には伝えていきたいと考えている。

二つ目は日本の伝統的な子育てについて、その方法を知り、保育の中での活用について学生に考えさせることである。日本の伝統的な和室環境や生活様式を取り入れている園を紹介したことによって、日本の子育てにも視点が開かれ、興味を持った学生もいた。例えば、子育てに関することわざ、地域に伝わる子育ての知恵、わらべうたや民話に込められた子育てのヒントを題材としたい。子育てに関する情報の一つとして知っておくと、保育を行う上での判断の材料となると考えるからである。

三つ目は保育室における音環境である。今回、保育現場での大きな音が耳につらいといった記述をした学生がいた。保育環境における音について、問題意識を向けてほしいと思う。複数の子どもが活動する保育室では音や声がまじりあう。さらに、室内の反響、残響といった響きも関係して、音声が明瞭に聞き取れなくなり、落ち着いて過ごせないことも生じる。子どもと保育者の心身の健康を守るために今後、音環境への関

心は重要な視点となってくる。これについても建築分野から、音環境デザインの提案がなされている（由田他 2022）。

これら 3 点を取り入れて、今後も園舎を通して保育環境設定と保育内容を俯瞰できるような授業実践を続けていきたい。なお、本稿では、本学こども教育学部が開学部し、1 期生が 4 年生となった 2018 年度から 2022 年度までの「保育実践演習」の授業改善を報告した。改善点を踏まえて取り組もうとするものの、コロナ禍によって対面授業の設定、実施に大幅な制約が課された。そのため、この期間、集中講義の形をとったのであるが、2023 年度からは通常の授業設定、つまり 15 週かけて授業を行う。学生が討議・作業のモチベーションを持続させて取り組めるよう、思考する学生と応答的に授業を作っていきたい。

#### 付記

- ・本研究は、京都光華女子大学研究倫理委員会の審査を受け研究遂行の承認を受けている（承認番号 166）。
- ・本稿はその一部を、下口美帆・和田幸子・山崎玲奈「保育者養成課程において園舎建築を学ぶー保育実践演習授業構築の歩みー」日本保育学会第 76 回大会発表要旨集 p-A-9-03（2023 年 5 月 13 日、於：熊本学園大学（オンライン開催）においてポスター発表している。

#### 注

1. レッジョ・エミリアにおけるプロジェクトとは、一つのテーマに基づいて、一か月や一年などの時間をかけて調査や表現、創作活動を深め、展開させていく保育方法である。
2. 仙田は子どもの遊びを促す空間構造として、回遊構造、シンボル性、ポーラス（穴）があること等を提示している。
3. 下口美帆・和田幸子・山崎玲奈「学びの集大成としての『保育実践演習』授業構築の試み」として、京都光華女子大学 2019 年度特別研究の助成を受けて行った。
4. 小児科医より子どもの保健医療と事故に関する講義を受け、その後セーフティハウスを見学し、事故

を防ぐための具体的な方法を学んでいる。

### 引用文献

- ・厚生労働省告示（2017）保育所保育指針
- ・厚生労働省雇用均等・児童家庭局（2018）保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について p.52
- ・定行まり子編（2014）保育環境のデザイン. 全国社会福祉協議会 pp.6-7
- ・下口美帆・和田幸子・山崎玲奈（2019）保育者養成課程における学びの集大成としての「理想の保育園づくり」～「保育実践演習」の授業実践と考察～. 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要. 第 57 号.pp.151-162
- ・下口美帆・和田幸子・山崎玲奈（2020）保育園の園舎建築についての調査研究―園舎建築と保育内容の相関に着目して―. 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要. 第 58 号.pp.31-45
- ・仙田満（2006）環境デザイン講義、彰国社、pp.123-124
- ・由田新・川合敬二・上野佳奈子・片山智子（2022）音環境の改善と保育実践への影響―建築音響からの提案を中心に―. 日本保育学会第 75 回大会発表論文集 pp.j99-100
- ・ウェブシラバス和洋女子大学 2023. 保育実践演習.  
[https://syllabus.wayo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2023&t\\_mode=sp&template=&no\\_id=231799](https://syllabus.wayo.ac.jp/web/preview.php?nendo=2023&t_mode=sp&template=&no_id=231799)（2023.8.10 閲覧）
- ・山梨大学電子シラバス. 保育実践演習Ⅱ.  
<https://syllabus.yamanashi.ac.jp/2023/syllabus.php?jikan=EEI142>（2023.8.10 閲覧）